

橋をつくるために

現代社会における摩擦と対話

フランシスコ教皇の言葉 – 「誠実な対話」と「人間の最悪の敵は、聞こうとしない人間です」が、日本を含め、様々な国の問題に当てはまる。ヨーロッパの移民・難民の受け入れを巡る衝突、イギリスの EU 離脱問題、米中と日韓の摩擦にしる、共通点は対話が成立しないことである。政治家同士の対談は、相手を徹底的に拒絶するのが前提であり、何を言われようと一蹴する。

何十年前から同じ問題で摩擦と対立を繰り返しているが、以前は対話を通じて共存してきた。考え、価値観が正反対という事実を認めたくえで対話をしていたのである。当時の政治家は、相手の意見を聞き、折り合いをつけたり、解決の糸口が見つからず、平行線になると察した場合は話を保留し、関係悪化を回避する冷静さを備えていた。何らかの制裁を課すにも事前に警告を発していた。誠実な姿勢で相手の話を聞く必要性を理解していたのである。

それに比べて今の政治家は、積もり積もった摩擦に対する不満という個人的感情で相手を叩くことしか考えていない。一方的な制裁・圧力という強硬手段で抑えつけるのが解決策と勘違いしている。互いに一步でも歩み寄れる策を考えることもなく、主張が通らなければ不満を募らせ、話を打ち切る。我慢の限界に達したところで一方的に制裁を課す。突然の制裁なので、当然相手も反撃に出る。貿易戦争という形で攻撃しても、影響を受けるのは輸出入に関わる両国の民間企業であり、衝突の煽りで観光産業や文化交流にも影響が出て、最終的には自国に跳ね返ってくる。短絡的で無責任としか言いようがない。国同士の武力衝突がない現代社会では外交でどれだけ摩擦が生じようと、対話で向き合うべきである。強硬手段が通用しても支配服従の関係であり、問題は解決しない。それが続く先には国交断絶が待ち受けているだろう。

EU の移民・難民問題では、何が何でも受け入れないという強硬策がとられている。シリア難民が押し寄せた際にはハンガリーとマケドニアでは国境が封鎖され、イタリアでは副首相（サルビーニ氏）が難民の救助船を入港させないという措置をとっている。自国では命の保障がなく、助かるだけでも良いという思いで命懸けで来るのだから、とりあえず入国させて、それからどうするかを話し合えば良いことなのだが、足の一步も入れさせようとする有様。NGO で働いているイタリア人の友人や支援者たちは「どういう理由・主張があれば、人助けは間違っておらず、助けるために私たちがいる。妨害するのは非人道的」と憤る。排除する人達は、仮に自分達が渡航先の国の海や山中で遭難したり、路上生活を強いられた際に、「外国人を助けるお金はない」と言われたら、誰にも助けを頼まずに自力で生き延びるか、そのまま死に絶える覚悟ができているのか。

日本ではヨーロッパのような外国人差別があまり表面化しないが、異国・異文化に無関心でありながら、中国と韓国への負の面ばかりを報道するメディアの影響で、両国に偏見と嫌悪感を抱いている人が多い。両国に無知・無関心でありながら、メディアが映す情報のみで感情を抱き、それ以上に調べようとしない。これは見知らぬ人に関する噂話を鵜呑みにするのと同じである。無知であることが愚かではなく、見聞きする情報のみを鵜呑みにし、それ以上に知ろうとしないこと、そして偏見を持ったまま相手を遮断するのが愚かである。無知・無関心でも、何の感情も偏見も持つことなく、情報を聞き流す方がよほど賢い。

最後に、私が2001年にフランスで語学研修を受けた際に、アルゼンチン人学生（カトリック教徒）が授業中に言った言葉を紹介します。911テロに対しアメリカが報復措置をとる可能性が出たときのこと。

「武力ではなく言葉による対話が重要。武力と暴力は人を傷つける。君達は共通の言葉を話す相手に石を投げつけることができるか。私達はフランス語を学んでいる。見知らぬフランス人を攻撃できるか。人に石を投げている自身の姿を想像してごらん」